

もうすぐ「オルセー美術館」コレクションがやってくる。そんな事を考えていたら、ふと思い出したことがあった。それは「異空間」の思い出である。

私がオルセー美術館を訪ねたのは、冬の夕方だった。興味が生じると没頭しやすい私は、先日も必要な写真を撮りながら、気が付くと三区7時間歩いていたが、外国でも興味に惹かれて歩いていると、いつの間にかバスで案内される市内観光スポットを歩き切ってしまうことがある。その時も、パリの歩道でふと立ち止まり「日没までにまだ時間があるな。オルセー美術館へ行こう」と脳裏にひらめいた。私は芋洗いな人混みと行列が大嫌いである。従って、冬だし夕方なら観光客も退けたらろうと脳が瞬時に判断した様である。こういうのを「思いつき」というのだろうか、私にはよくそういうことがある。ルーヴル美術館へ行った時もタイミングが良かった。

さて、そのオルセー美術館であるが、中の空間は心地よかった。そして人の往来があるにも関わらず、周りに誰もいない空間を独り占めした時間あった。そんな時、私は時間が消えて異空間にいることに気付く。観ているのは私なのに、逆に作者に、作品の主人公に、静かな視線で見つめられているような不思議な感じがするのである。その時私は、ある絵画の一室で不安を感じ、あわててその部屋を後にした。その気分から逃れるために無意識に歩いた先にあったのは、ロダンとカミーユ・クローデルの彫刻だった。そこで一度立ち去りかけた私をクローデルの彫刻が引っ張る。もう少しいてねと云うように。何故かそれを二度繰り返した。

それからノートルダム寺院でも異空間を体験した。私はある観光客の団一団として入ったのだが、移動していく途中で何気なく振り向いたとき、私はひとり祭壇と向かい合っていた。半径2mくらい周りには誰もいない。まるで私だけが一つの丸いスポットに収まってしまったように。その時も威厳ある穏やかな視線と向かい合った。時間にすればおそらく1分も経っていないだろうが、時間が意識から消える時は存外長く感じるものである。

そしてパリ市立グラン・パレ美術館。その日は朝一番でそこへ行くつもりで、開館数分前にチケット売りに並んだ。人が少ないのと、朝という新鮮な空気で気分が良い。ゆったりと観られる。そして大きな窓のある室の中央に大きな彫刻がひとつ立っているところがあった。私が入るとすれ違いに人が出てくる。その時その部屋に朝の光が差し込んで彫刻を照らした。その瞬間、私は神々しく美しい異空間にひとり。次の人が入って来て意識が現実に戻った時、光りの精のようなものが遠のいて行った。

それから今度は、ヴァチカン市国のシステリーナ礼拝堂のミケランジェロの『最後の審判』である。個人客のほか、団体観光客が押し寄せて混んでいる。当然室内入場制限がある。そのとき私は先の団体の後姿を見送り、次の団体が入ってくる小空間に、またもや独りとなった。時間感覚が消え、堂々と、まさに堂々という言葉でしか表せないような威厳ある雰囲気の中で、私は『最後の審判』と向き合っていた。そして正面からばかりでなく、左右からの視線にも包まれているのを感じた。

さて、ここで考える。異空間というのは人間の脳の内部が作り出すものだろうか、宇宙という自然が作り出すものだろうか。わからない。ただ振り返ってみると「異空間」は「無欲という精神の純粹状態」のときに発生したような気がする。(2014.7.5)